

◆2010年 2月

八木健選「七句」・・・（七七をつけて見ました）

- 1 特売の体力勝負冬の陣 （鈴木 榮）  
・・・年があげれば福袋の陣
- 2 せまさうな七福神の宝船 （田中章子）  
・・・今日のお客はメタボ揃ひで
- 3 海鼠食ふ始めて食ひし人讀へ （種谷良二）  
・・・たしかはじめは刑罰として
- 4 頻尿に温もる間なき布団かな （笠 政人）  
・・・洩らすときには温もりあれど
- 5 煤払畳を叩く山鹿流 （桜井宇久夫）  
・・・イケメンとても埃まみれに
- 6 電池切れ佳境に入りし初電話 （三塚不二）  
・・・話し足りないぐらいがよろし
- 7 噛み違ふズボンのチャック冬の朝 （田村米生）  
・・・大切なもの挟まぬやうに

秋月裕子  
冬至湯に肌もふんわり匂ひけり  
君が居るだけでクリスマスプレゼント  
天空に塵ひとつなく银杏散り

麻生やよひ  
畳替えせぬ間に夫婦別れかな  
事業仕分け終へ煤払ひ省略し  
実万両チャージの出来ぬ知恵袋

足立淑子  
恋の予感魚氷に上るその時に  
草食系男子にあげる山葵漬  
あれも無駄これもムダだと涅槃西風

有吉堅二  
おたふくもおかめも覗く初鏡  
書くは大儀もらふはうれし年賀状  
数へたとてどうなるでなし除夜の鐘

高橋真紀子  
三日坊主決意新たに日記買う  
流感や夫手作りのスープ飲む  
仕事とて大虎となり去年今年

高橋素子  
物掴む形のままに皮手袋  
家出とは出家にあらず道をしへ  
坂の上の雲の加熱や伊予の冬

滝沢 安太郎  
野辺送るその仏より歳暮来し  
怪物かペリカン舞へる小春空  
ほられをる小鉢の冬芽児の笑ひ

田中章子  
せまさうな七福神の宝船  
初夢の妻の角なし美人なり  
獅子頭外しても又獅子の顔

数へたとてどうなるでなし除夜の鐘

安藤淑子  
声は可憐ごつい男の灯油売り  
目もかすれ埃も見えぬ年の暮  
糸目つけつ放して迎ふ大晦日

飯塚ひろし  
寒紅を貰ひ浮き立つ八十齡  
身を焦がす恋は御法度雪女  
初句会ハナカミ王子と呼ばれをり

井口夏子  
底冷によせてはかえす小波かな  
ふくろうのひるあんどんやほほほほほ  
風呂吹きなのほらふきながら火傷する

池田無了  
時々酔虎も運べ救急車  
当世流口紅男ひげ女  
除夜の鐘半鐘のごと打ち鳴らし

伊藤浩睦  
掛乞ひも出ないシャッター通りなる  
首を長くして春を待つきりかな  
天国に負けて極楽蓮も枯れ

稲沢進一  
風邪引いて「扁桃腺！」と言はれたる  
流されてゐるとも知らず浮寝鳥  
誰にでも会釈天皇誕生日

今城夏枝  
目交を右往左往せし冬の蜂  
初雪や伊予の山々震はせる

越前春生  
初電話妻に詫びごとと言ふてをり  
職なしを嘆きて洗ふ冬菜かな  
喪服着て鯛焼買って戻りけり

奥脇弘久  
空つ風太り過ぎの身罪深し  
街を飛ぶローストチキン聖夜なり  
ポインセチア真つ赤な嘘をつき通す

笠 政人  
芒原漕ぎし手傷のキスの味  
頻尿に温もる間なき布団かな  
歩く間も惜しとケータイ街師走

可知豊親  
福達磨鉢巻締めて失神す  
二世帯にそれぞれの刻姫始  
弁天がすべてを仕切る宝船

加藤 賢  
風邪気味や予防注射の効きすぎる  
意外にもぬくしタオルの頬被  
湯ざめして遥かなる恋遥かなり

獅子頭外しても又獅子の顔

種谷良二  
鮫鯨の獄門刑に処せらるる  
熱爛や内緒話が店中に  
海鼠食ふ始めて食ひし人讃へ

田村米生  
隣席は医者集ひや薬喰  
俳諧と打てば徘徊一茶の忌  
噛み違ふズボンのチャック冬の朝

飛田正勝  
朝富士の裾野を隠す大根干す  
初仕事三つ星の味盗みけり  
妻七度夫は三度や年忘れ

戸谷笑子  
平成の滑稽菌と煤籠  
湯豆腐の浮いてくるまでにらめつこ  
おでん煮て家出ごころや旅支度

永井一朗  
焼詣のほかほか指を喜ばす  
百舌勘定してやられたり年忘れ  
誰かある草履を持ての寒さかな

永島董玉  
縦のものの横にもせぬが煤払  
着ぶくれに口差挟む余地もなく  
暖々に饒舌となる日向ぼこ

西 をさむ  
宝くじ一枚買って年用意  
寝ていても腹の空くなり年の内  
炬燵蒲団妻余りにも近過ぎる

原田 曄  
冬の茶房四人の席のおばちやんら  
日の移る方へ躍りつ日向ぼこ  
焚火の字つくづく焚火してをりぬ

彦阪義久  
「たら」「れば」が百八を越え年暮るる  
五七五と戯れている去年今年  
大根は身の振り方を考えぬ

久松久子  
戦時下は昨日も今日も芋煮会  
鳶紅葉業平橋にからみつく  
柚湯して嘘も衝かぬに針千本

日根野聖子  
平凡は単純なこと大根干す  
ただ眠ることに専念裸木は  
アラームに眠り砕かれ冬の朝

藤岡蒼樹  
豆腐屋は湯豆腐はふはふして早寝  
褐色の禿頭縁に日向ぼこ  
冬の窓蠅は盲かぶつかりぬ

加藤澄子

みかん送ればリンゴの届き歳の暮  
若者やペットボトルを湯湯婆の  
隔靴壮快パチン木の実の弾ぜる音

川島智子

劇画くるやうに過ぎ去る師走かな  
お天道様の匂ひに焦がれ蒲団干す  
最高の死に装束で散るもみぢ

北村真佐子

ウイルスやここにも来しか枯紅葉  
いく色の絵の具使いし山紅葉  
時雨も愛しボジョレの日なれば

久我正明

裸木により分割される朝日かな  
秋日和居間の深さを測りけり  
露天風呂モミジで隠す陰部かな

草薙一朗

こめかみに貼る頭痛薬一葉忌  
聖菓奉じ家路へ企業戦士たち  
落命の記事の当夜も河豚屋混む

工藤泰子

大根の首を洗つて食べにけり  
日向ぼこ軽き頭の重くなる  
ひらがなに交換したる日向ぼこ

倉方 稔

すぐ尖る江戸っ子言葉空っ風  
御降りや地球儀廻し此处と指す  
神棚へ真空パックの鏡餅

黒澤正行

前山の居士も大姉も雪被く  
死に下手も生き下手もある焚火の輪  
ふぐりに触れ初湯の女の子これなんだ

黒田忠一

昼は医者夜はお酒で年暮れて  
図書館に居眠り主婦や年の暮れ  
雪搔ひて汗搔ひてある日曜日

小杉 隆

尻あぶるほどにあらずや落葉焚  
鬮汁や触れ合ふ膝は人の妻  
髭面を見上げて与ふお年玉

桜井宇久夫

煤払畳を叩く山鹿流  
焼き芋を後ろに隠し猿山へ  
落葉踏む生き恥の音低からず

佐治洋一

老犬の服艶かし冬の朝  
この宵は我が身捧げん残り蚊に  
ごきぶりのミイラ発見掃納

佐藤古城

虎猫が通す一家の嫁が君

藤森荘吉

凧を避けて逃げ込む古本屋  
あと五人咳を気にして待つ医院  
障子たて大人物の小関古

藤原セツ子

オニゴッコして霊園の落葉たち  
飛び石の上や熟柿のぺつちやんこ  
遠吠えの車笛に起こされ冬の朝

二神重則

惚れられてクシャミーつで病かな  
年賀状出すか止めるか二十年  
初雨泥の敷石踏み迷う

坊野留吉

御慶してオイ呼びさるる損な俺  
菊花賞馬より騎手のインタビュー  
丑食べて寅をみつむる年の夜

前川敏夫

幾何学の図形を網羅おでん種  
朴落葉には天敵のハイヒール  
予防ですと断り人と会うマスク

松尾軍治

好きな子へ投げて気を引く雪つぶて  
飯おたべ宿はあるのか冬雀  
ベーゼされマスクでかくすキスマーク

丸山紘一

古希の年潮時として賀状切り  
吉野家に孤独の並ぶ聖夜かな  
就活も婚活も成らず憂き世暮れ

三木蒼生

冬眠のくちなは錦飾りをり  
癌に顔つけられてをり温め酒  
美女エスコートし成人の野獣

三塚不二

白菜の芯に越冬する奴め  
千両や綱を張れども盗まれる  
電池切れ佳境に入りし初電話

三橋一笑（三橋真砂子）

木通採り縄張ありし故山かな  
みかん剥く携帯持たぬで盛り上り  
手鏡にほどよき曇り初化粧

虫倉蟬音

長閑より臍のまさる事無き日  
自給率上げねば種を蒔く一日  
騙される電話でも欲し万愚節

むつみ

空舟で我が家に来る宝船  
長靴の左右は間はずクリスマス  
死支度ぼちぼちでんな去年今年

虎猫が通す一家の嫁が君  
お年玉もらふに恐い奥座敷  
父の物が恐い女の児の初湯かな

佐藤義子  
どか雪に雪ダルマ手足も出ない  
デフレでも鱈だけは安くない  
住みつけた私のアゴのものもらい

佐野萬里子  
おせち残り入れて豪華な茶碗蒸  
蕪汁千枚漬けの残りにて  
雑炊は昭和の主婦の昼定食

佐野ゆきこ  
夜道行く影法師が道案内  
寒空に雀枯木の花になり  
餌あさりゴミからゴミへ旅カラス

柴田真一  
丑年の時を隔てて虎がまつ  
ぐつた煮や海山の秋飽きもせず  
何となく暇そうな暮れの郷

清水吞舟  
三寒の我に四温の妻の檄  
屈強のなんと女々しき歌留多かな  
絵双六我が来し方を見る如し

首藤虎男  
新記録世界と日本的に成り  
諸々の四季を切別ける鍛冶屋かな  
夏秋と時季抜き頭農先走り

壽命秀次  
柚子貰ふ譲らふ運転説かれつつ  
ボーナスの仕分け基準は妻の胆  
冬用意先ず犬小屋を転居さす

白井道義  
あつさりと過ぎし一年古日記  
マスクした古女房に惚れ直す  
身知らずの老いの一徹大根抜く

杉村福郎  
今日会ひし近所の人に賀状書く  
岩風呂を出でて氷柱を折りにゆく  
河豚死となりたくはなし断れり

鈴木和枝  
煮ると光る黒豆は亡母の目  
大根のしっぽから貰う咳止め  
おいしそうな冬草をどうしようか

鈴木 榮  
特売の体力勝負冬の陣  
居てほしくない時の夫ぬれ落葉  
賞の札見てから愛でる菊花展

高田敏男  
年の暮猫の手忙し宅急便  
マニフェスト右往左往や鎌鼬

村上美和  
木洩れ日をさがし当てたる龍の玉  
小春日や猫は肉球放り出し  
海風にてんやわんやの石路の花

百千草  
枯はちす涙線脆くなるばかり  
最後まで一歩埋まらず雪堂  
毀れゆく記憶山茶花散りやまず

森 要  
来年も困碁宜しくと打ち納め  
やはり出た純国産の松飾り  
今年いま昨年中はと書く賀状

森岡香代子  
新玉の宴や箸のぶつかれる  
御神籤を桜の枝へ結びけり  
白息をとめてつくなり除夜の鐘

八木 健  
捨てかねるメモの数多の古曆  
「もういくつ寝る」と数へ日のわらべ唄  
焼芋の栄養を言ひ皮を食ふ

柳澤京子  
新春の宝くじ列並ぶ認痴夫  
セチ料理眺むるだけの年金者  
干し大根吾れの顔しわ数えけり

山内重昭  
寒林に落日からめ取られけり  
なあタマよひどく寒いよまだ寝てよお  
咲いているひふみよ五六七八紅い梅

山下正純  
もつ鍋の野菜氷山溶け行きて  
大白菜日めぐりされて子白菜  
風凧ぐや烏も鹿も和ぐや日向ぼこ

山本あかね  
聞き分くる雪解凍のドレミファソ  
灯ともして何やら怖き菊人形  
着膨れて来しそのかみマドンナよ

山本けい子  
実南天雨粒きらり輝かせ  
犬連れて師走の街に塵拾ふ

山本 賜  
駅伝の吉書を飾る渋谷駅  
上海に絨緞選ぶ気迫かな  
大嚏耳鼻咽喉科医に到着の

横山喜三郎  
捨てがたき物に埋もれて冬ごもり  
五十年同じ文言年賀状  
悪筆も名書めきて初硯

吉田恵子  
たらいうどん冬を一気に食らいたる  
婆元氣孫に伝授の独楽回し

飛べぬ鳩風刺漫画の去年今年

高田菲路

子どもより妻を抱き上げ勝ラガー  
助手席を濡らして消えし雪女郎  
鴛鴦の出戻りらしき一羽かな

高橋 都

新米のおむすび持ちていざ行かん  
餌をくれぬ人の群かと浮寝鳥  
大噺会場しんとしづまれり

春雛のそろそろ出番と頭なで

渡辺さだを

余生でも一年の計元旦に  
冬將軍五泊六日でやつてくる  
枇杷の花添えて工場の身売りかな

渡邊美代子

薄紅梅ふつくらと帯締めてみる  
ぽっこりと馬穴の氷抜けにけり  
駆け足で黒猫が行く霜の朝